

第120回 日本皮膚科学会総会 (初のハイブリッド開催)を終えて

(2021年6月10日～13日)

※パシフィコ横浜とWeb配信のハイブリッド開催

大槻 マミ 太郎

自治医科大学皮膚科学講座教授

開催形式、学会テーマ

2021年6月10日より4日間、第120回日本皮膚科学会総会を、パシフィコ横浜の現地およびリモートのハイブリッド形式にて開催いたしました(図1)。コロナ禍から脱却することができない中、皮膚科学会として初の完全Web開催となった昨年とは異なり、今年はハイブリッド開催ということでこちらも初の試みでした。しかし、学会会場の感染対策には万全の配慮を行い、結果として大きなトラブルもなく無事終了できたことに安堵するとともに、全国から参加された皮膚科医ならびに関係者、学会事務局の皆様へ感謝申し上げます。われわれとしてはベストを尽くすも、会員の皆様にはご不便

をおかけしたことと思いますが、初めて経験する開催方式という事情もあり、至らぬ点はお容赦いただければ幸いです。

本総会のテーマは「Dermatologic, Dermatropic, Dermatrophic」で、2つの造語を使って「デルマ三段活用」と銘打ち、皮膚科を発展させたいという目論見を表現しました。学会ロゴ(図2)は、スパイクをもった新型コロナウイルスを宇都宮餃子で封じ込めたイメージ(懇親会中止で餃子提供は叶いませんでしたが、せめてもの餃子参画です)、マスコットキャラの3匹の猿(図3)は2013年に開催した東部支部学会の日光三猿ロゴを踏襲したもので(1匹は液体窒素をもってコロナ封じ込めに向かうイメージ)、こちらも「三猿活用」というオチがついております。



図1 会議場外観(安部正敏先生撮影)



図2 学会ロゴ



図3 マスコットキャラの3匹の猿

第120回 総会 11+αの見どころ! 大槻 マミ太郎
(第120回日本皮膚科学会総会会長)

6月10日(木) 14:30-16:30
会場特別企画3
Dermatropic/trophic 他科領域と繋がる皮膚科研究

6月10日(木) 16:45-18:45
会場特別企画4
Epidermotropic 皮膚病理

いずれも、皮膚科に様々なベクトルを向かわせる、そして結果的に皮膚科を進展させたい、というテーマをタイトルに含んだ企画です。企画2のEpidermotropicは、皮膚科専門医の増加によって不可欠な病理診断ですが、この表皮的な病態は皮膚科の発展には限定的で、深部にも関与しています。

6月11日(金) 15:00-17:00
会場特別企画5
「COVID-19 pandemic 1年を経て:有識者が語る」+「COVID-19緊急提言」

自治医科大学大井良三学長は、日本医師会COVID-19対策委員会の会長に就任以来、HPRを立ち上げて積極的に活動し、私も「大学医問」というテーマで寄稿しました。そのアップデートに際してご協力いただき、本誌掲載後、オンラインセッションの緊急提言セッションも同会場に設けています。

6月12日(土) 12:35-13:35
会場特別企画6
皮膚センサーのヘルスケアと医療への応用

東京大学工学部長久保雅也先生は、前年度の総会に引き続き、ウェアラブルの最新の話題をお話しされます。昨年は講演時間が短くてもっとたっぷり聞きたいという期待が過ぎ、また長谷先生とは個人的繋がりもあることから、2年連続でご登壇することになりました。

6月12日(土) 13:40-15:10
会場特別企画7
AIが切り拓く未来の医療

「患者に寄り添って成長する最先端世代」の注目を集める中、他科領域から新進気鋭の3名の演者を迎えました。千葉大学の川上義典先生には皮膚疾患のAI診断、予備も含めた今後のAI医療研究の展望を、そして多田智裕先生には内視鏡領域、熊本県立大学先生には精神科領域をお話ししました。

6月12日(土) 15:15-16:55
会場特別企画8
宇宙医学と加齢医学の接点

東京大学の外科医からJAXAの宇宙飛行士へ転身した大槻先生と、宇宙医学を志して加齢医学の分野に進出する自治医科大学の研究者、黒尾誠先生がペナリングで、宇宙医学と加齢医学のセッションを設けました。夢が膨らむ化学反応が起るに違いないと期待しています。

6月13日(日) 9:10-10:10
会場特別企画9
遺伝統計学による皮膚科疾患の病態解明への試み

遺伝統計学の権威、大阪大学ゲノム生物学講座教授の田中雄介先生は、最近日本人集団の遺伝子に関する国際的な研究で、食生活習慣と皮膚病の関連性を明らかにしました。今回はトゲノム・オミクス解析の最新技術やトピックを中心に、皮膚科学を主軸とした疾患研究に役立ててくれる、お話しさせていただきます。

6月13日(日) 10:20-11:20
会場特別企画10
広がるゲノム編集のターゲット

遺伝子工学の権威である東京大学教授の清水 雅先生は、X線結晶構造解析を用いて、ゲノム編集のターゲットや細胞の遺伝子編集を明らかにしてきておられます。今回は、近年注目を集めているCRISPR-Cas9に関連するプロジェクト、ゲノム編集制御ベンチャーの話をうかがう予定です。

6月13日(日) 11:30-12:30
会場特別企画11
生命を捉えなおす一動的平衡の視点から

山手学院大学理学部の福岡伸一先生は、生物学者としてベクター「生物と生物の相互作用」を、生命の動的平衡という概念を提示されています。未知のウイルスについてもこの視点から論を深めたいと、コロナ禍の最中にある我々に重要な見方を示してくださる予定です。

6月11日(金) 18:35-19:15
会場特別企画12
デルマトオケストラ

慶應義塾大学から招かれたデルマトオケストラ、ベートーヴェン第九のフル演奏は本誌の醍醐味として、会場全体で楽しめる演出を企画しました。リモート参加の皆さんにも全編ライブ配信する予定です。録画に限りがあり日数詳細は未定ですが、我々に力を与えてもらえれば幸いです。

6月12日(土) 18:15-19:15
文化講演「笑ある人生」

笑点でおなじみの落語家、六代目三遊亭楽楽亭には、「笑ある人生」をテーマにお話し頂きます。ご自身もがんの治療経験を持ち、また深刻な病状にも関わらず、笑いを通して人生を生きる楽楽亭、このコロナ禍における我々皮膚科医にとっても大きな励みになるでしょう。

第120回日本皮膚科学会総会開催概要
詳細はこちら⇒<https://jdd120.jp>

大会プログラム
2022年6月10日(木)～12日(日)
会場1 パシフィコ横浜(神奈川県横浜市中区みなとみらい5-1-1)
会場2 大槻マミ太郎(自治医科大学皮膚科学講座 教授)
会場3 自治医科大学皮膚科学講座(事務局長: 新川武雄)
〒229-0499 栃木県宇都宮市湯元331-1
TEL: 0285-58-7360(直通) FAX: 0285-44-4857
会場4 公益社団法人日本皮膚科学会内大会運営部運営チーム
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-4
TEL: 03-3811-5079 FAX: 03-3812-6790
E-mail: jda2021@dermatol.or.jp

図4 11+αの会場特別企画



図5 生物学者/作家としてご活躍の福岡伸一先生による「生命を捉えなおす一動的平衡の視点から」



図6 古川 聡先生(JAXA)ご参加のセッション「宇宙医学と加齢医学の接点」

学術プログラム ～学びある人生～

さて、昨年に続き今年も欧米からのリアル参加は困難な状況で、時差がクリアできればリモートでライブという選択肢もあるのですが、今回はいわば純国産的なプログラムに粋を尽くしました。11個(おまけを加えると計14個)を数える会場特別企画(図4), その中にはCOVID-19関連で3つ(図5, 図8), ゲノム解析やゲノム編集, AI関連, ME(皮膚センサー), 宇宙医学(図6)等々を含みますが、これらはすべて、純国産にかけける会頭の心意気を反映しています。また、会場特別企画に加え、教育講演も会頭が直接介入して積み上げたため、計62セッションとなりました。今年の土肥記念国際交換講座は、トレド大学およびテキサス大学の教授を歴任されたAkira Takashima 先生で(図7), 結局リモートとなりましたが、生粋の日本人への授与は60回を超える歴史の中で初めてでした。

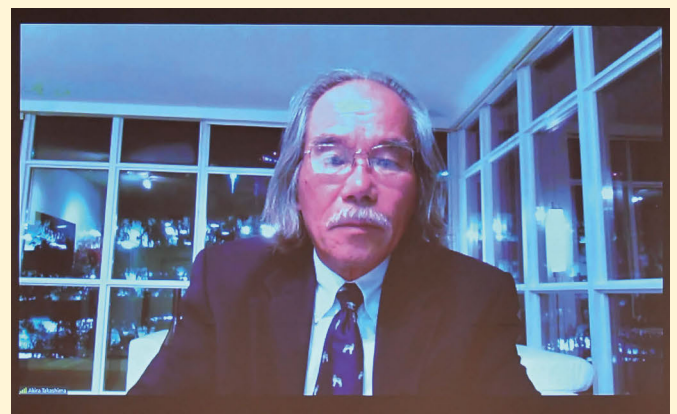


図7 土肥記念国際交換講座初の日本人授与者となったAkira Takashima先生

いただいた演題数は、一般演題389題(口演80, ポスター309), Oral Presentation in English(OPiE)79題(口演48, ポスター31)でした。OPiEは昨年より減りましたが、海外からもそれなりの参加があったのは好材料でした。企業共催セミナーは79を数え、



図8 山岡邦宏先生による緊急提言「イベルメクチンはCOVID-19に対して有効か?」

モーニング15, ランチョン39, イブニング25でした。参加者に関しては、完全Web開催に切り替わった前回(5,900名超)を上回る、6,794名超の方にご登録いただきました。現地参加は約1,500名であり、久しぶりに挨拶が叶った人たちの間では小声の会話ながら、マスクの上からでもわかる笑顔が印象的でした。現地・リモート合わせて2,000名を超える聴講があったのは、唯一3,000名超を数えた会頭特別3のCOVID-19セッション、会頭特別7の皮膚科レジェン

ド・アーカイブ、特別教育講演2の今山病理学、そして会頭講演の4つでした。一般教育講演は例年同様、医療安全・感染対策、医療制度、食物アレルギー、薬疹に加え、今年は湿疹皮膚炎(の再考)がベスト5でしたが、どの会場も満遍なくそれなりに“静かな盛況”であり、極端に参加人数の少ない会場はまれでした。会頭特別2の「Epidermotropic 皮膚病理」は、初日の夜という時間帯にもかかわらず1,700名超の参加者があり、嬉しいかぎりでした。

会頭演奏、デルオケ、文化講演 ～芸術ある人生、笑いある人生～

「語ら猿(語らざる)会頭講演」と題して自分に課したミッションでは、スライド映像とピアノ演奏のみによるメッセージとヒーリングを目指し、大学および医局スタッフの自己紹介とともに、東日本大震災や物故教授等を追悼する曲を弾き、多くの方から感動、感謝のお言葉をいただきました(図9)。2013年の東部支部学会の会頭講演を再現するような涙を誘う場面もありましたが、実は学会場のフロアで合間に流していたのは、その東部支部学会で作成した記念CDから(自作の学会テーマ曲、花は咲く、等)でした。

慶應義塾大学から襷を渡されたデルマトオーケ



図9 ピアノ演奏による「語ら猿(語らざる)会頭講演」



図10 デルマトオーケストラ
オーケストラを率いる戸倉新樹先生と前川事務局長がコロナ禍特有の“肘タッチ”で挨拶

ストラ(デルオケ)も、帰ってきました(図10)。現地集合でできるかぎりの演奏ということで、過去に演奏経験のあるシューベルトの第5交響曲を、リモート参加の皆さんにもライブ配信することができました。来年こそ、念願のベートーベン第九フル演奏が実現することを祈るばかりです。また、文化講演としては『笑点』でおなじみの三遊亭円楽師匠に「(コロナ禍でも役立つ)笑いある人生」をお願いしました(図11)。ご自身が癌を患われ、折からの薬の副作用もあって痛々しいお姿だったのも事実ですが、今回は特別にWeb視聴も認めていただき、われわれにとって大きな励みになったことは間違いありません。なお、誰よりも早く学会印象記を執筆いただいた安部正敏先生(札幌皮膚科クリニック)には、充実した学会プログラムから“学びある人生”，会頭講演の演奏から“芸術ある人生”，そして円楽師匠の文化講演から“笑いある人生”の三段活用という絶妙なコメントまでいただき、会頭の狙いよりも巧みな総括に私自身感激している次第です。

アンケート結果を踏まえた今後への展望

学会のアンケート調査では、「非常に良かった」45.5%，「良かった」44.5%を合わせると9割の方に高評価をいただきました。11個(会頭特別企画)と62個(教育講演)に膨れ上がったセッションについては、多すぎる(21.5%)とのアンケート回答もあったものの、トピック選択については高評価が86%を占め、低評価は皆無でした。ライブ試聴に使用した機器はPCが約半数を占め、スマートフォン、タブレットの順でした。他の会員からの声としては、参加場所が野外、空港、リゾートホテルなど、Web視聴に慣れたと思われる多様性も感じられるとともに「子どもの世話をしながらでも」、さらには「コロナワクチン接種後の副反応で寝ながらでも」視聴できたという、いまだからこそこの回答も目に留まりました。

さて、コロナ禍でいつの間にか、学会の標準装備＝WebがNew Normalになり変わりつつあります。ただ、アンケート調査でハイブリッド希望が84.5%であり、Webのみ希望(13.9%)を大きく引き離したこと、また「現地開催オンリーには絶対戻らないで



図11 三遊亭円楽師匠による文化講演

ほしい」という意見が目立ったこと、そしてなんといっても今回ハイブリッドが実際に成功を収めたことで、今後の形式はハイブリッドが主流になっていくでしょう。実際、今回は会場参加者の3倍以上の方がリモートで参加されており、さらに学会終了後も年度内ならいつでも、どこでも、何度でもEラーニングで学習できるわけで、生涯教育システムはさらに充実した感があります。なお、教育講演がEラーニングで学会後も視聴可能なことには、90%超が「非常に役に立つ」との回答でした。

自治医科大学のこの小さな医局でコロナ禍の日皮総会を担当し、慶應義塾大学から受け継いだ襷をハイブリッドの形で次につなぐことができたのは、皆様のおかげと神の慈悲によるものと受け止めております。国際化を推進してきた総会がハイブリッドでどうなるか、そして招宴会や懇親会が再開できるのか(正直、コロナ禍になる前は山下達郎と竹内まりやの夫婦デュエットを招致しようと目論んでいたりました)、これは今後の課題となりますが、コロナの収束と懇親の場の復活、そして皆様のご健康と皮膚科学会の発展を願うとともに、最後にこのやんちゃな会頭を支え続けてくれた、皮膚科学会事務局赴任前からの長いお付き合いの学会チーム、通称“山々コンビ”(山田紀子さんと山本亜紀子さん)と当科の鉄腕コンビ(事務局長の前川武雄先生と秘書の野澤いずみさん)にも心からの礼を述べて、稿を終えます。